

# 荒海に生きるタメ年男。

活字離れと言われる現代に重厚な物語で挑み続けるのは、自身も認める不器用な男だ。彼の作品に登場するのはヒーローではなく人間臭い男たち。だが、その圧倒的熱量は読者を魅了して離さない、そんなタメ年男の原点に迫る。

取材・文：山川敦司 撮影：松田道人

作家

## 増田俊也

挑発的なタイトル。しかも、上下二段組みで700ページに及ぶ長編。2013年に発売されベストセラーとなったノンフィクション『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』（新潮社）を読み、作家・増田俊也の執筆に対する執念と彼が放つ熱量に圧倒された昭和40年男も多いのではないだろうか。かくいう筆者もページをめくる手が止まらず、仕事そっちのけで徹夜して読みふけてしまった、という思いがある。

木村政彦は全日本選手権で13年連続保持、天覧試合優勝も含め15年間不敗のまま引退した「史上最強」と言われた柔道家だ。だが、その後プロレスラーに転身、行なわれた力道山と激戦（通称・昭和の巖流島）で敗れ、その名は死してなお「力道山に負けた男」という不名誉な称号に付きまといわれていた。〈柔道を志したものでして、なんとしても木村先生の無念を晴らしたい！〉そして、取材を始めてから18年後、書き上げたのが同著だった。それは文字どおり全身全霊を傾け、命を懸けて世に送り出された一作だった。

そんな増田に会って話が訊けるといいう。待ち合わせ場所に指定されたのは愛知県のある駅。10年落ちだという愛車ジムニーで現れた増田はスタジオにダメージジーンズといういでたち。「こんな田舎まで来ていただいて、すみません。狭いけど、ま、乗ってください」腕組みをしている写真が多いせいとかぞや強面なのでは、と思いついでいたが、対面した増田は人懐っこい笑顔が印象的な人物だった。ただ、ジャンパー越しにみえる盛り上がった胸の厚みは現役時代さながら。目深にかぶったキャップからのぞく耳には、激しい寝技を経験したものだけに与えられる勳章が今も残っていた。

**練習量がすべてを決定する  
柔道との出会い**

増田が生まれ育ったのは、愛知県春日井市。父親は福岡生まれの叩き上げ警察官だった。

「親父は警視庁と愛知県警を受けて九州に近い愛知を選んだらしいのですが、引越してきた当時はあたりは原野と沼ばかりで、まだ電気も通っていないかった。近くには牧場があって道には牛が普通に歩いていたら、ライオンを飼っている家からライオンが逃げ出して大騒ぎになったこともありました」

そんな原風景のなかで少年時代を過ごした増田が柔道と出会うのは中学時代。父親の本棚で見つけた柔道教本がきっかけだった。

「背負い投げのことが書いてあって、



昭和に生まれた僕たちが何を見てきたのか  
を若い人たちに作品で伝えたい。

見よう見まねで学校で友達に試してみただけです。すると相手が吹っ飛んだ。全然力を入れていないのにね。で、これはおもしろいなあって」

中学校時代は『巨人の星』の影響で野球部に所属。だが、次第に柔道への思いが強くなり高校は柔道の強豪校、愛知県立旭丘高校を選んだ。ところが、2年生の春の練習で衝撃を受けることになる。

「名古屋大学で行なわれた名大杯に行った時のことです。試合の後に合同練習があつて名大の選手と乱取りをしたんですが、寝技でポコポコにされたんですよ。投げようとしても引き込まれて、ガンガン極められて…まったく手

が出ない。あれには驚きましたね」

それが七帝柔道との出会いだった。七帝柔道とは戦前に帝国大学と呼ばれた東大や京大、東北大など全国7つの国立大学がしのぎを削る寝技中心の柔道。講道館柔道とはルールも異なり、審判による「待て」がなく、有効、効果などのポイントもない。つまり、勝敗を決めるのは一本勝ちのみなのだ。

さらに、井上靖が旧制四高（現在の金沢大学）柔道部の合宿に参加するひと夏の経験を描いた自伝的小説『北の海』を読んで「練習量がすべてを決定する柔道」という言葉に強く惹かれた。机の前に「目標、北海道大学柔道部」と書いた大きな紙を貼り、1浪、2浪

### 日本柔道史上最強の男が背負った哀しき人生

木村の無念を晴らしたい——そんな一念から18年の歳月をかけ描いた本書。だが、取材から見えてきたのは振り上げた拳を下すことができず、結果自分を追い詰めていく男たちの姿だった。「もういいだよ、と肩を叩いて仲裁し、和解させてあげたい」。そんな増田自身の思いが詰まった渾身のノンフィクション。



『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』増田俊也著／新潮社刊／2,808円（税込）

自動車整備工場のガレージを思わせる仕事場。デスクに散乱するコーラのペットボトル。壁には物書きの原点となった新聞社・北海タイムスの看板が。同紙は98年に廃刊したが、「僕が大学中退だけど、『北海タイムス』が大学院で、そこで修士課程を取り、『中日新聞』で博士課程を終えたみたいですね」

# それぞれに結論を出して行く過程こそが大切。

壁に張りつけられたスーパーモデルのヌードグラビアに昭和の香りが漂う。スレンダーな彼女たちの写真を眺める増田は巨乳モデルは好みでないとか



と北大だけを受験。3年目の春、北大の門をくぐった増田はその足で柔道場に向かった。そして、柔道漬けの大学生活が始まったのである。

## 練習に耐えることが、生きる」とへの問いかけに変わった

七帝柔道には年に一度、7大学が雌雄を決する七帝戦という大会があり、彼らはこの闘いに勝つために1年間つらい練習に耐える。七帝戦には勝ちを取りに行く、抜き役」と引き分けに持ち込むための、分け役」とがある。前

者は相手を絞め落とすこと、後者は相手に絞め落とされないことが、その役割だ。

「だから、相手の技が決まって、参った。をしても、相手は占め落とすまで技を解いてくれない。関節技ならば骨が折れても、参った。をしない、それが七帝戦ではごく普通のことなんです。立ち技にはラッキーパンチみたいなのがあるけど、寝技は強い奴が必ず勝つ。それが講道館柔道とのいちばんの違いなんです」

そのため日々繰り返し返される練習（乱取り）も実戦さながら。道場には汗の蒸気が立ち込め、あちらこちらから部員たちの悲壮感漂ううめき声がある。「練習は2時間半。時間だけ聞くと大したことはないんだけど、とにかく密度が違う。抜けられないんです。最初が寝技乱取りで、そのあとに立ち技を入れた自由乱取りとなるんですが、結局先輩たちから寝技に引きずり込まれちゃう。締められている時はブルトーザーで轢かれっぱなし、ずっと落ちつぶされっぱなしという感じです。とにかく相手を抑え込んで弱らせる。蜘蛛が糸に引っかかったカマキリを徐々に弱らせて最後は仕留めるでしょ、あんな感覚ですね」

でいた。増田の順番がやってきた。

「では、あなたの長所をアピールしてみてください」

「男が人前で自分の長所を言うようになったらお終いです！」

顔を見合わせ苦笑いする重役たち。だが、その眼差しはまっすぐだった。入社後は柔道経験者ということもあり、中日スポーツから格闘技や相撲担当に、という誘いもあったが「行きたくても行けない先輩がいるのに、自分だけいい思いをしたら卑怯者になる」と固辞。最終的に北海タイムス同様、編集部に落ち着いた。

## 魂に火をつけた猪瀬直樹のコラム

入社2年目の1993年。増田が目にしたのが木村政彦の訃報を伝える記事だった。その多くには「力道山に負けた男」というタイトルが躍っていた。

「僕らみたいな底辺の柔道家でも、あれだけの練習量があった。そんな僕らがいとも簡単にやられる人たちをポコポコにしてしまう人がいる。で、その人たちをさらにポコポコにしてしまう人たちがいる。柔道ってどんだけ頂が高いんだ、と。木村さんがどれだけ強いかよくわかるから、腹が立ってしかたがなかったですね」

さらに晩年の木村を取材した猪瀬直樹が、木村から「力道山は俺が呪い殺

さらに練習が終わると3百回の腕立て伏せ。畳の上は部員たちの汗で水たまりができたという。

とはいえ、有名私大のように柔道推薦で入学した部員はいないし、五輪に出られるわけではない。つまり、いつでも退部できる自由を持っている。にもかかわらず、なぜ、それほどまでして苦行に耐え続けるのだろうか。

「確かに練習の効率を考えたら科学的じゃないかもしれない。でも、量から入って質を高める。そうやって必死に練習することで、それぞれがそれぞれに結論を出していく。その過程こそが大事だと思うし、そのなかで生きること自体にどんな意味があるのかを考えさせられました。で、結局その時には答えが出なくても、それを考えることが生きるということなのかもしれないと。僕にとつて北大での日々は、そんな自身への問いかけをグッと凝縮したような時間だったような気がします」

## 男は人前で自分の長所などアピールできない

4年生の7月、増田にとつて最後の七帝戦。北大は東北大学を破り5年連続最下位から脱出。優勝には遠く及ばなかったものの、増田の柔道部員とし

ての青春が終わった。

「七帝戦の後、大学を辞めてしばらく肉体労働をしていたけど、やっぱり物書きになりたいと思ってるね。『北海タイムス』の人事部を訪ねると入社試験は夏前に終わっているという。でも、人事担当だった管理局長の横に座ってずっと話しこんで帰らなかったんですよ。今考えてみると、よく獲ってくれたと思うけど、むこうも新鮮という



仕事場には意外にも女性ファッション誌がたくさん積まれていた。「ファッション誌はよく見ますね。だってこっだけすごい写真がたくさん入って数百円ってお得すぎるでしょ」

した」という趣旨の証言を取り、「週刊文春」誌上でそれをコラムで書いたことが、増田の魂に火をつけた。

だったら、俺が木村先生の汚名を晴らしてやる！ 執念の取材が始まった。当時増田は27歳。以来足掛け18年の取材を経て「木村政彦は——」を上梓した時、増田は45歳になっていた。

「木村先生は力道山の突然の八百長破りでKOされ、恥をかかされたことが許せず短刀を手に力道山を付け狙った。でも、最終的にはそれを思いとどまった。つまり、木村先生にも力道山にも、それぞれに言い分があるということ。僕は原稿を書き上げた時、木村先生や力道山の歳を上回っていました。でも、だからこそふたりの哀しさがわ

かった。おそらく、あの歳じゃなかったら描けなかったでしょうね」

それは、激動の昭和という時代に生きた男たちへのレクイエムだった。出版に際し関係者の間からは「木村政彦なんて誰も知らない」「こんな分厚い辞書みたいな本が売れるわけがない」という声もあった。だが、そんな不安をよそに同著者は1週間、10刷りを記録、同年の大宅壮一ノンフィクション賞と新潮ドキュメント賞を同時受賞した。授賞式の会場で北大の柔道着を羽織った増田はこう語った。

「この賞は僕にとつても編集者にとつても、そして読者、格闘ファン、柔道家、みんなにとつての天覧試合です」

その瞳からは、大粒の涙が頬を伝つ



道着にはこだわりがあり、東京・原宿にある有名店のものを着用。ただ、練習が終わる頃にはたっぷり汗を含み重量感もハンパではなかった



「今は普通にスーツも着れるけど、学生時代は着れる服がなかった（笑）」という当時のスナップ。北大中退直後は肉体労働をしながら生計を立てた



人生には挫折がつきもの。  
ただ、どつ負けたか、どつが重要なんです。



・Profile 増田俊也／ますだとしなり  
昭和40年、愛知県生まれ。北海道大学中退後、新聞記者となる。2006年『シャトゥーン ヒグマの森』でデビュー。12年『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』で大宅壮一ノンフィクション賞、新潮ドキュメント賞をダブル受賞。小説やノンフィクションのほか、随筆、評論でも独自の世界観を描いている

ていた。

翌年、増田は自伝的青春小説『七帝柔道記』(KADOKAWA)を上梓。そこには浮ついた恋愛など一切皆無、年に1度行なわれる七帝戦を目指し、ただひたすらがむしゃらに練習に打ち込む若者たちの日々だけが描かれていた。「確かにきれいな女の子が好きです、と言われたらうれしいですよ。だけどそれ以上に怖い上司から、実はお前のことを一番買っていたんだ」と言われたら、目の前の霧がパッと晴れて、もう死んでもいいと思うくらい舞い上がっちゃう。それが男だと思っただけ。だから、男は何歳になっても集団を作るし『プロジェクトX』を観ると、毎回泣いちゃう。でも、男はそれでいいじゃないかな」

後悔しないために、今持っている力はすべて出し切る

そんな増田が50歳という節目を迎え中日新聞社を退職、作家として生きる道を選んだのは昨年4月のこと。理由を訊ねると、しばし沈黙の後、返ってきたのが「やつぱりね、後悔したくなかったから」という言葉だった。後悔したくない——。増田には忘れられない思いがある。それが北大時代の後輩の死：彼は自ら命を絶つたのである。

「年下なんですけどね、理想の男だった。最初は僕らに猛反発して、でも、

鬼のように怖かった先輩たちが泣きながら懸命に稽古している姿に感化されてね。七帝戦で優勝して先輩たちに恩返ししたい、と実際彼らが4年生の時にそれを成し遂げてくれてたんです。彼が亡くなった時、親御さんのところに行ったら、お母さんが「あの子は北海道でどんな生活していましたか？」って…。僕らが「こんないいところがあった、こんなふうに使わせていたんですよ」というと、そうですか、そうですかと…。ご家族の気持ちを考えて、どうして間に合わなかったんだろう、って。まだ24歳。俺たちは彼を救えなかった：申し訳ないし、言葉にならない。もうね、そういう後悔はしたくないから」

増田の目頭がみるみる赤みを帯びていく。そして言葉を選ぶように言う。「学問もスポーツも同じで、たまたま与えられた環境や天からもらった才能なんて実は誇るものではないんですよ。大切なのは今日の前にあることにどれだけ真剣に向き合えるかということ。小説を書くのも、コラム書くのもそう。推敲に推敲を重ねることで後悔を残さないようにしていきたい。それが僕ら昭和生まれのひとつのアドバンテージかもしれないね」

命を懸けて伝えたい作品を生き残っているうちに残したい！

増田が描いた『木村政彦は——』と

『七帝柔道記』は現在、共にマンガ化(前者が『週刊大衆』、後者が『ビッグコミックオリジナル』)され、若い世代にも圧倒的な支持を得ている。彼が描く男たちの群像劇は強く、そして哀しい。若い頃は物事を白黒させ、筋を通すことが、強さだと思っていた。

「でも、硬いものが刃こぼれするようには、絶対的な強さなんてない。どんなに強くても自分より強いものが現れれば負けてしまうし、その証拠に力道山だって木村さんだって負けてしまった。でも、柔らかさを身につければ、どんなに強い人が出てきても負けることはないはず。柔らかくなるためには優しくなること。だからね、僕はいちばん低いところで水のようにありたいと思ってるんです」

柔道家として名を残したわけではない。作家としてのデビューも40歳を過ぎてからだし、書くべきものだけを1作ずつ書きたい、という信念から作品を量産していく作家ではないだろう。

だが、その武器用な男が渾身のエネルギーを込めて描き切る、なんともいえない人間臭さが読者の心を鷲掴みにして離さない。最後に、タメ年の昭和40年男にこんなエールを送ってくれた。

「梶原一騎先生は50歳、手塚治虫先生は60歳で亡くなり土に返っていきまして。信長も50歳で死んでいるし、僕だっていつ死ぬかわからない。鮭が川を上り卵を産んだ後、力尽きて流れてい

### Information

#### マンガ版も人気

増田の2作品が、マンガ化されて人気となっている。『KIMURA』は『プロレススーパースター列伝』で知られる原田久仁信、『七帝柔道記』は『おかみさん』の一丸により現在『ビッグコミックオリジナル』にて好評連載中だ。



『KIMURA』 増田俊也原作／原田久仁信画／双葉社刊／600円(+税)



『七帝柔道記』 増田俊也原作／一丸画／小学館刊／596円(税込)

くように、僕も流されながらなんとか尾ヒレを動かしているけど、あと熊に食べられるのか、あるいは鳥に啄まれてしまうのか。でも、それは必ずそのあとに生きる何かのための栄養になるはず。だから、昭和に生まれた僕たちが何を見てきたのかを若い人たちに作品で伝えたい。小さいことかもしれないけれど、それが昭和40年に生まれた僕の役目だと思っています」

増田俊也は文学というフィールドで、今も七帝柔道が続けている。